

「熊野三山」と「徐福の宮」参拝記 (H26.12.2~3)

陽林会 岩水龍峰 (文責)

林陽寺の霊木「なぎ」にひかれて二度目の熊野詣で行ってきました。今回は、さらに足を伸ばして熊野三山の奥の院と称され、秘境といわれた奈良県十津川村に鎮座する「玉置神社」にお参りました。熊野速玉大社では千年の「なぎの木」、千点を超すとされる国宝・重文を鑑賞。熊野那智大社では、正式参拝、境内の説明を受け、那智の滝にお詣り。熊野本宮大社では、熊野信仰の解説を受け、本地垂迹説に基づく本地仏「阿弥陀如来、薬師如来、十一面観音菩薩」の信仰をも含めて、熊野の地は、神仏の霊場であると熱っぽく語っていただきました。「般若心経」を読誦しお詣り。奥社である「玉置神社」に向かいました。1000m近くある玉置山の9合目近くにある神社であり、狩野派の絵師による60点にも上る重文級の襖絵にビックリしました。熊野信仰は、「蟻の熊野詣」と言われるように都から上皇や法王を初め、多くの方々が熊野に参詣したのです。その信仰の象徴が「なぎ」の木です。当山の先祖は、何を思って庭に「なぎ」の木を植えたのでしょうか。いまから150年位前のお話ですね。



今回は、陽林会の第3回研修旅行としての参拝でした。高速道路も紀州路まで延び、国道42号線の荷坂峠を越えることなく、紀勢自動車道を一気に尾鷲までと、遠いと思っていた那智も意外と早く着けるようになりました。

神仏が宿るといわれる熊野の山々。平安時代、山岳仏教が発達し、修験道の修行者達は、金峰山・大峰山を越えて熊野に入り、熊野は修験の道場となっていきました。また、神仏習合の思想や、浄土教の広がりとともに那智の浜は補陀落（ふだらく）浄土への渡海地となりました。さらに、熊野



信仰のもっとも古い形態とも言うべき那智の滝への信仰と観音信仰が結びつき、那智山が観音霊場ともなり、熊野への参詣者が次第に多くなっていきました。本地垂迹（ほんちすいじやく）思想によって、熊野の仏教化はいっそう進み、熊野の祭神の本地仏が定められていきました。それによれば、熊野本宮大社の祭神である家都御子（けつみこ）大神が「阿弥陀如来」に、熊野速玉大社の祭神速玉大神が「薬師如来」に、熊野那智大社の祭神夫須美（ふすみ）大神が「千手観音」とされています。これによって本宮が西方極楽浄土に、新宮が東方瑠璃光浄土に、那智が補陀落浄土に見なされ、人びとの信仰がますます深まっていきました。

かつては、この三社には、仏堂もあり一大宗教施設の様相であったが、明治の神仏分離令により、仏堂が廃された。しかし、那智では観音堂が残され、やがて青岸渡寺として復興。当山は、西国一番札所となった。

こうして熊野信仰は、院政時代に隆盛をきわめ、上皇をはじめ女院や公卿らの参詣があいつぎ、鎌倉時代になると武家から一般庶民に至るまで、現世安穏と後世極楽を願って多くの人々が参詣するようになった。時、至って、熊野三山は、ユネスコの世界遺産『紀伊山地の霊場と参詣道』（2004年〈平成16年〉7月登録）



の大切な構成資産となりました。

熊野速玉大社は、熊野権現の名で一台宗教王国を構成していた。神倉山にまつられていた神を現在の社地に移し、それ以来、神倉山の元宮に対し、ここを新宮と呼んだ。現在の社殿は明治16年9月に炎上し、その後再建されたものである。熊野までの道には熊野権現の末社であり、休憩所や宿泊施設の役割を兼ね備えた王子が京より那智まで建てられ、九十九王子あったと言われている。



熊野本宮大社



熊野本宮大社にて

熊野那智大社は、かつては那智神社、熊野夫須美神社、熊野那智神社などと名乗っていた。また、熊野十二所権現や十三所権現、那智山権現ともいわれた。権現とは、日本の神々を仏教の仏が仮の姿で現れたものとする本地垂迹思想による神号である。仏が「仮に」神の形を取って「現れた」ことを示す思想である。大社は、現在は山の上に社殿があるが、元是那智滝に社殿があり滝の神を祀ったものだと考えられている。那智の滝は「一の滝」で、その上流の滝と合わせて那智四十八滝があり、熊野修験の修行地となっている。

熊野本宮大社は、現在の社地は山の上にあるが、1889年（明治22年）の大洪水で流されるまで社地は熊野川の中州にあった。現在、旧社地の中州には、日本一高い大鳥居（高さ33.9m、横42m、鉄筋コンクリート造、平成12年完成）が建っている。熊野



玉置神社



本宮は熊野三山の中心で、全国に3000社以上ある熊野神社の総本宮です。主祭神は家都御子大神は、本地仏「阿弥陀如来」とされ、神仏習合を取り入れ、極楽浄土の中心にある仏の阿弥陀如来が本地仏になったことから、熊野の地は浄土を求める人々の聖地となっている。熊野は「人生甦りの地」ともいわれ、今日では「パワースポット」的存在である。

玉置神社は、大峰山系の霊山の一つである玉置山の山頂直下に位置し、大峯奥駈道の摩（なびき）のひとつである。社務所および台所、梵鐘は国の重要文化財。境内地の杉の巨樹群は奈良県の天然記念物。古くより熊野から吉野に至る熊野・大峰修験の行場の一つとされ、平安時代には神仏混淆となり玉置三所権現または熊野三山の奥院と称せられ霊場として栄えました。社務所内部は杉一枚板の板戸及び板壁60枚余で仕切られ、この全ての襖に幕末の狩野派の絵師である橋保春らの筆による、松・牡丹・孔雀・鸚鵡・鶴などを題材とした豪華な花鳥図が描かれており、各室は襖絵の題材の名によって呼ばれています。他に「徐福の宮」を参拝。秦の始皇帝の命を受け「不老長寿」の薬を求めて来日し、新宮に上陸したと言われています。また、村民が基金を出して造った「谷瀬の吊り橋」を見学しました。ご苦労様でした。研鑽を積み、豊かな人生でありますように。



徐福の宮

